

ボタニカルアートに魅せられて

杉崎紀世彦・文子夫妻



観察と訓練、植物の「あるがまま」を写写することがボタニカルアートの真髄と語る杉崎夫妻

山形市の富神山の麓。町を一望する高台のアトリエ「杉崎ボタニカルアート美術館」に杉崎紀世彦・文子夫妻を訪ねたのは新緑が色濃くなり始めた5月の中頃であった。

夫妻がボタニカルアートに出会ったのは30数年前のことになる。長年勤めていたガソリンスタンドで理不尽な扱いを受けて気落ちしていた紀世彦氏は、道端に咲くドクダミの花に自分を重ね「なんて美しいのだろう」と思ったという。

それからのことは「奇跡の連続」と表現する。星野富弘氏の詩画『風の旅』、松本キミ子著『三色の絵具箱』との出会い。日本ボタニカルアートの創始者太田洋愛氏に私淑できたこと。そしてなによりも紀世彦氏にとって最大の奇跡は植物に詳しく絵の上手な文子さんと出会ったことである。

東京・渋谷生まれの紀世彦氏は、戦時下の昭和20年に母の実家がある長井市に疎開した。東京の家は空襲で焼失し帰ることはできず長井のガソリンスタンドに就職した。あるとき、薬局に風邪薬を買いに行ったところ「風邪は薬で治すのではなく滋養をとることが一番」という女性がいた。長井市に生まれ親戚の薬局店を手伝っていた文子さんだった。

46歳で会社を辞め、わずかばかりの退職金で中古のタンクローリー車を購入。山形市内で灯油を販売しながら二人三脚でボタニカルアートの世界に。国内外で2人展を開き、読売新聞日曜版に挿絵を連載した。

「ボタニカルアートは植物を正確に細密に描くことを基本していると思いますが、杉崎さんご夫妻の絵は、植物に忠実でありながら、植物である花にも血が通っているように温かく、味や香りさえ漂ってくるのです」（星野富弘氏）と高い評価を受けている。

訪れたときはコロナ感染防止のため工房での教室やNHK文化センター講師として山形・仙台定禅寺・郡山の各教室は休講中。「先の見えないことを心配してもしょうがない。見えるようになったら猛烈にやれるよう準備しておく考え。オンラインを使って遠隔授業を考えている」と紀世彦氏。「自然の中で太陽を浴び、風に吹かれ、虫に食べられ、雨に打たれた植物たち。巡りくる季節の中でそんなモデルに出会えたときの喜びを大切に描いていこうと思います」。文子さんは3年越しの牡丹の仕上げに取り掛かった。

（今月号から本誌の表紙に2人の作品を紹介します）。